

会話における認識的権威の交渉

——終助詞「よ」、「ね」、驚き表示の分析を通して——

金 井 薫

1. はじめに

日本語の自然会話において、二人以上の会話参加者が一つの事柄に言及し合っている発話の連鎖に注目すると、同じ情報が表現を変えて繰り返されたり、一旦同意した事柄についてあたかも初めて耳にしたかのように振舞うなど、無秩序、無意味に見える発話のやりとりがしばしば観察される。本研究では、そのような発話連鎖における終助詞「よ」、「ね」、「驚き表示」の分布を会話分析の枠組みを用いて分析し、その背景にある動機を明らかにする。

2. 先行研究

2.1 終助詞「よ」、「ね」

日本語の自然会話では、終助詞「よ」、「ね」は非常に高い頻度で用いられ、その機能についてこれまでにたくさんの研究が行なわれてきた。その中の多くは、「よ」、「ね」の意味機能を対比的なものであると考え、それぞれ、話者の情報に対する心的態度を表す標識として定義している(神尾 1990; 片桐 1995; 金水 1991; 金水・田窪 1998; 井上 1999 など)。また、「ね」については、対話相手に対する心的態度(Cook 1990, 1992; 神尾 1990)を示す標識として論じられることも多い。

2.2 認識的権威

終助詞「よ」、「ね」を分析する新たな試みとして、会話分析の枠組みを用いて実際の会話データを分析する研究も行なわれている(Tanaka 1999, 2000; Morita 2002, 2003)。これらの研究では、「よ」、「ね」が実際の会話コンテキストの中でどのように用いられているのかが検証されており、作例の中から「よ」、「ね」の意味機能を規定しようとする従来の研究に対し、新たな観点を提案している。本研究では、会話分析的な見地から提案されている“epistemic authority (以下「認識的権威」)(Heritage 2002)”という概念を用い、評価的発話/情報提供発

話とそれに対する応答発話から成る発話連鎖において、「よ」、「ね」及び驚き表示¹¹がどのように分布しているのかを対照分析し、その機能について新たな視座を加えることを目的とする。

認識的権威とは、ある事柄について相手よりもよく知っている、あるいはある事柄を評価する権利という点において相手よりも優位にあることを示す (Heritage 2002:200)。Heritage は、評価的発話と、それに続く応答発話から成る発話連鎖 (下記例 (1) 1行目-2行目) を観察し、その中で言及される事柄に関し、誰が認識的権威を持つのか、ということが、発話の形に影響を与える重要な問題であることを指摘している。通常、応答発話は、評価に後続する、という順序的な二次性ゆえに、自分の主体的な意見としては受け止められにくく、相手の評価的発話に同調・依存しているという印象を与えやすい。Heritage は、しばしば応答発話の初めに付けられる感嘆詞 “oh” は、このような印象を与えることを回避し、自分が相手の発話からは独立して当該の評価をしているのだ、ということ、即ち「認識的独立性」を有することを主張する手段として機能していることを示した。(1) はその一例として挙げられているものである。

(1)

- 1 Emm : The=y gosh uh this is really been a wee=k ha=sn'it?
 2 Nan : → Oh== it rilly ha=s.
 3 Emm : I[t's rih]
 4 Nan : [Gee it ri]=lly, it rilly ha=[s.
 5 Emm : [Ah won't ev'n turn the tee vee o:n,h

(Heritage 2002: 200)¹²

(1) は、ロバート・ケネディの暗殺が起きた翌週、事件からの一週間について話す、Emm(a)と Nan(cy)のやりとりからの抜粋である。1行目と2行目が評価的発話とそれに対する応答発話というペアを成している。2行目でNancyは、発話の冒頭に“oh”をつけることにより、Emmaの「ひどい一週間だった」という評価は言われるまでもなく自分も考えていたことだ、という、認識的独立性の主張を標示し、認識的権威をNancyに認めない態度を表しているものとして分析している。

この「認識的権威」という概念を終助詞「ね」の分析に応用した研究として、Morita (2003)がある。Moritaは、「ね」が発話コンテクストによって多様な機能を担うことを認め、これを会話参加者間の“alignment (提携関係、筆者訳)”を交渉するための言語的な資源であると論じている (2003: 168)。さらに、「ね」は認識的権威という見地から見れば、英語感嘆詞“oh”とは逆の機能を果たすものと考えている。つまり、終助詞「ね」は認識的権威を相手と

シェアして相手との alignment を持とうとする態度の標識であり、評価的発話に「ね」がつく場合、当該の評価に対する相手の参加を求める機能を果たし、応答発話に「ね」がつく場合、その発話が相手の評価的発話によって促された依存的なものであることを示すものであるとしている (ibid.: 164)。

3. 本稿の分析

3.1 目的

本研究では、認知的権威という観点から、会話参加者達が同一の事柄について言及し合う評価発話—応答、及び情報提供—応答という発話連鎖の中で、どのように認知的権威の所在が交渉されるのかを明らかにする。その際、終助詞「よ」、「ね」、驚き表示が重要な機能を果たす言語表現として対照を成していることを示し、これらの言語表現の解釈について新たな提案を試みる。

3.2 データ

日本人母語話者同士による家族、友人、姉妹などによる日常会話を約 210 分間分録音し、文字化したものをデータとした。³⁾ 会話は全て face-to-face で、自宅、学生控え室、ドライブ中の車内、アルバイト先の控え室等、インフォーマントにとって日常的な場面で行った。

4. 分析

前述したように、終助詞「よ」、「ね」は多くの先行研究の中で対照的な意味機能を持つものとして取り扱われてきた。この対比を認知的権威という点から捉えると、「よ」は聞き手に対し交渉の余地のない認知的権威を持つ立場を示し、「ね」は聞き手との相対において弱い、不完全な権威を持つという立場を示すものと言うことが出来る (Morita 2002: 226-227)。以下では、このような「よ」、「ね」の対照性に加え、認知的権威を完全に相手に委ねる応答の形として驚き表示にも注目し、この 3 つの発話形が発話連鎖の中でどのように分布しているか、それが認知的権威の交渉という点でどのように機能しているのかを分析する。

4.1 認知的権威がシンメトリックである場合

日本語会話における評価発話/情報提供発話—応答発話の連鎖では、互換的に「ね」が用いられることが非常に多い。(2) を例に取り、このことを認知的権威という観点から捉えてみたい。3 行目で、順序的には優位に立つヒカルが、自分の認知的権威が不完全であることを示すことによって相手に依存する立場を提示し (「-ね」)、マキコが同じスタンスで応じるこ

(4) サキ：姉、カヨ：妹、ドライブ中の会話

(子供に車を貸すことについて)

1 カヨ：それはいいんだけど、

2 サキ：うん。

3 カヨ：なんか、

4 ないと困るのよね。

→5 サキ：いやだからそうなのよ。

6 もうなんか車の生活しちゃうてる[じゃない]。

→7 カヨ： ね!

→8 そうなのよ。

(4) では、4行目で妹が「困るのよね」と言ったのに対し、5行目の姉は、内容的に同意しているにも関わらず「いや」という逆説の標識を冒頭につけ、「-よ」の形で発話をしている。この形を用いることにより、サキは、発話の順序的な二次性を無効にし、自分が完全な認識的権威を持つことを主張している。その結果、「前から自分が考えていたことを相手が言ってくれた」、というような強い共感のニュアンスを伝えることにつながっている。この発話を受けて7行目～8行目の妹は、自分も「ね」から「よ」に切り替えることにより、同じ強度で認識的権威を主張し、「強い共感」というスタンスを取ることに同意している。''

4.2 認識的権威がアシメトリーである場合

次に、認識的権威という観点において、発話者間に不均衡な関係が生じているケースを見てゆきたい。

まず、評価的発話あるいは情報の提供が「よ」を伴う場合、即ち完全な認識的独立性、認識的権威を主張している場合、これに対する応答には、驚き表示が現れるのが最もよく見られるパターンであり、これは先行研究が予測しているパターンである（森山 1989; 神尾 1990）。

(5) 姉妹の自宅での会話

1 妹：松葉さんねちょっと昇格してたよ。

2 姉：あそうなんだ。

(6) 姉妹の自宅での会話

1 妹：昨日あんまりソロの人がねえ、

2 姉：うまくなかったの？

3 妹：そううまくなかったよ。

4 姉 : あそうなんだ.

(5) の1行目および(6)の3行目では、妹は姉が当該の情報を持たないことを確信している。応答する姉の方も、その予測通り、自分がその情報を初めて聞いたのだということを「あそうなんだ」という驚き表示によって明示している。このようなケースでは、片方の発話者が完全に認識的権威を独占しており、もう片方の発話者は全く認識的独立性を持たないという状態であり、アシメトリーな関係のパターンの中では最も安定した形ということが出来る。

上の2つの例では評価的発話や情報提供発話の発話者は、聞き手に認識的独立性が全くないことを正しく予測しているが、そのような予測が最初から出来ていない場合もある。その場合、相手の応答発話の形式に応じてその後の発話の形式（即ち認識的権威に関するスタンスの取り方）が調整される。

(7) 新しく同じ職場に就くことになったバイト仲間同士の会話

(アルバイト先の社員について)

01 エイジ : みー, みんな自分勝手ですよ、

02 他人のことどうでもいいみたいな,

03 なんていうんですか.

04 サチ : 入り込んで.

05 エイジ : 入り込んで.

→ 06 さー, 佐藤さんが入ってから少し変わったんですよ

07 それでも.

→ 08 サチ : そうなんですか.

→ 09 エイジ : 佐藤さん変えるんですよ.

10 サチ : @[@@]

11 エイジ : [一人一人].

(7) では、6行目のエイジの発話は、「佐藤さんが（職場に）入ってから（職場の雰囲気）少し変わった」という評価をサチも共有するものとして相手の uptake を求める「よね」形 (Morita 2002) を用いている。³⁾ しかしながら、これに対するサチの驚き表示 (08 行目) は、この評価がサチにとって全く新しいものであり、サチがこのことについて認識的権威を全く持たないことを認めるものである。これは即ち、相手に認識的権威を完全に委譲することとなっている。この発話を受けたエイジは 09 行目で同じ情報を「ーよ」形で言い直しており、認識的権威を引き受けることに同意したことが明示化されているものと解釈できる。同じ情

報に同じ話者が言及するのに「よ」から「ね」、あるいは「ね」から「よ」に切り替える場合の多くは、やりとりの中からこのような動機付けが生じているからだと考えられる。

「-よ」形に対して驚き表示が対応するパターン（上記（5）～（7））に比べると頻度は大幅に低くなるが、「-よ」に対し、「-ね」で応えるという組み合わせも観察される。しかしながら、この場合の応答発話は、先行する相手の発話をそのまま繰り返したり（「すごいよーすごいね」）指示詞を使って同意する（「そうだね」）といった、応答発話に典型的な形を取ることは少ない。

（8）サキ：姉、カヨ：妹 ドライブ中の会話

（カヨの息子が新しいガールフレンドを家に連れて来たことについて）

- 1 カヨ：十一時か十二時までには帰って来てって言ってたら、
2 つ- 一緒に来ちゃったのよ。
3 サキ：あああ。
→4 それが手だったのよ。
→5 カヨ：もしれないね。
→6 サキ：こまであれしたのよ。
→7 テクニック使ったのよ。
8 カヨ：@@@

（9）父・母・娘の家族3人での夕食中の会話で

- 1 母：Sもやるの？
2 娘：しーしー知らないけど、
→3 やってたらやるでしょうよ。
4 母：ああ、
→5 やりそうだね。

（8）では、カヨの息子がガールフレンドを連れて来た経緯について、サキが「それが手だったのよ」という評価発話をしている。この判断に対してカヨは「ね」を使って応じているが、相手の判断のもっともらしさを低く見積もる（「かもしれないね」）、という評価を新たに加えている。

同様に、（9）の例でも、娘の「（S選手も野球の試合で乱闘が行われていたら）やるでしょうよ」という評価に対し、母は「ね」を用いて同意しているが、ここでも「やりそうだね」と、S選手のキャラクターを想起しながら自ら推量を行っているということを言語化している。このように、「よ」を使って認知的権威を主張している相手に対し「ね」を用いて応答する場合、相手に自動的に、受動的に同意しているのではなく、自分の判断を経て、独立に認

識した上で同意している、ということが暗示されると言えよう。

最後に、(10) では、「ね」が不完全であるとは言え認識権威を主張するものであることが明示的に現れている。そして認識的権威をめぐる交渉がいくつもの発話にもまたがって顕著に観察される。

- (10) マキコ：義姉、ヒカル：義妹、ミドリ：ヒカルの娘
- 01 マキコ：..じゃ分量だけ。
 02 分量だけ書いてけばいいんだわね？
 03 ヒカル：あそう[そう].
 04 ミドリ： [う=ん].
 05 マキコ：..じゃまたひとつ--
 06 ミドリ：これ[もおいしそう]じゃない？
 07 ヒカル： [それだから=]
 → 08 ..だからこれほんとにヘルシー[よ].
 09 マキコ： [ヘルシー].
 → 10 ヘルシーね.
 11 ヒカル：すっごいヘルシー.
 12 ヘルシーよりも易しいからいいわね.
 13 ミドリ：@@[@]
 14 ヒカル： [@@]@@@
 15 ヒカル：いや,
 16 ヘルシーでおいしい.
 → 17 マキコ：あそう.
 18 ヒカル：私こんなに野菜だけがおいしいって初めてだったもん.
 → 19 マキコ：ほんと=？
 20 ヒカル：うん.

(10) では、ヒカルがマキコにある料理（ラタトゥイユ）の作り方を紹介している。この料理に関し、8行目でヒカルは「だからこれほんとにヘルシーよ」という評価発話を述べており、この件に関して完全な認識的権威を主張している。これに対しマキコは、「ヘルシーね」と応じている。この時、マキコが驚き表示で応答することによって完全に認識的権威を相手に認めていないということが、ヒカルにとって問題となっており、その後のやりとりを動機付けている。11～12行目でヒカルは、自分の8行目の発話を一旦覆し、「ヘルシーよりも（その料理を作るのが）易しいからいいわね」という評価に置き換え、さらに、15～16行目で、

「いや、ヘルシーでおいしい」という「最終結論」を述べている。この発話では、相手に語りかける終助詞を使わないことによって、「—よ」形よりもさらに強く、この評価に対して相手が認知的権威を主張することを拒んでいるのではないだろうか。このことは、17行目、19行目のマキコの応答発話から読み取ることが出来る。マキコはラタトゥイユが「おいしい」ことは既に知っており（これ以前のやりとりで言及されている）、16行目のヒカルの発話から新しい情報を得ていないにも関わらず、「あそう」という驚き表示で応え、さらに「ほんと=？」と応えることにより、認知的独立性を主張するのをやめ、相手に権威を委譲する意思を言語化しているものと解釈出来るのである。一方ヒカルは、19行目のマキコの驚き表示に対して「うん」と応えることで、マキコが17、19行目で取ったスタンスを受諾した形で二人の関係性に納得したことを表しているものと考えられる。

5. 考察

前節では「認知的権威」という観点からやりとりにおける「よ」、「ね」、および驚き表示の分布を分析した。本節では、前節の分析結果について、日本語の会話における認知的権威の位置付け、及び認知的権威の交渉における終助詞「ね」の機能について考察する。

5.1 認知的権威の交渉

Heritage (2002) が認知的権威について論じる以前にも、「情報に対する接近度 (森山 1989)」、「情報の所有権 (神尾 1990 : 5)」、「発話によって提示する仮説について、話し手 (始発者) と聞き手とでどちらがより強い仮説を持っているか (金水 1991 : 26)」、など、使用される用語は多様だが、これに類似した問題が日本語の発話の形に影響を与えるということは指摘されてきた。しかしながら、本研究では、話者の情報あるいは対話相手に対する心的態度を、発話の時点で決定されており発話に表出されるものとして捉えるのではなく、会話のプロセスの中で交渉されてはじめて決定されてゆくものとして捉えられることを示した。⁶⁾ 日本語会話において会話参加者は、認知的権威を相互に共有する、互いに別個の権威を主張する、あるいはどちらか片方に権威があると認め合う、などの関係性のいずれかで合意に達するまで、交渉を行うものと考えられる。従って、ある事柄に言及する上での認知的権威に関してどのような立場にあるのか、ということは、話者一人一人の頭の中で決定されるものではなく、いわば“interactional achievement (Schegloff 1982)”として捉えられるべき問題として位置付けられる。終助詞「よ」、「ね」、そして驚き表示を、認知的権威を交渉するための言語手段として捉えることにより、実際のコンテクストの中での使用の動機をよりの確に描写することが可能になるのではないだろうか。

5.2 終助詞「ね」の機能について

4節で行った分析により、「よ」を用いて完全に認識的権威を主張している相手に対して終助詞「ね」を用いて応答する場合、これは、自分にもある程度は認識的独立性があることを主張し、ひいては相手の認識的権威の完全性に対する異議を表す標識として解釈されるということが指摘された。特に例(10)のように、応答における「ね」の使用が対話相手に許容されないケースを考慮するならば、「ね」が“affective common ground (Cook 1992)”, というようなポジティブな対人的態度を表すとは必ずしも言えないということになるだろう。「ね」がどのような意味機能を担うか、どのような対人的態度を伝えるか、という問題は、一義的に規定できるものではなく、発話コンテキスト、会話参加者達の相関によってダイナミックに変化するものと考えられる。

6. おわりに

本研究では認識的権威という観点から評価的発話 / 情報提供発話とそれに対する応答発話における「よ」、「ね」、驚き表示の分布を分析することにより、これらの発話形式の使用は発話者一人一人の中で予め認識的権威の所在を判断した上で選択されるものではなく、認識的権威の所在を交渉するための言語資源として捉えられることを示した。このことをより一般的に換言すると、会話における発話を発話者の発話意図の表出として捉えるのではなく、対話相手との相対的な関係性を交渉するプロセスとして捉えることにより、発話形のスイッチや同一情報の繰り返しなど、一見無秩序、無意味に見えるやりとりが、会話参加者にとって意味ある、必要な手続きとして機能していることが分かるのである。

最後に、今後の課題として、以下の二点を挙げたい。まず、「よ」、「ね」とイントネーションとの相関の問題である。「よ」、「ね」の意味機能がイントネーションによって変わることはこれまでに多く指摘されている(井上 1993; 小山 1997; Eda 2000)。本研究で扱ったデータを分析した限りではイントネーションが「よ」「ね」による認識的権威の交渉に変化を加えていることは観察されていないが、直感的に考え、何らかの影響を及ぼしていることは明らかであり、その関連性を検討する必要がある。

また、本研究では自然会話をデータとしたため、「よ」「ね」に先行して現れる言語要素(「～んだよ」「～のね」など)が多様であったという問題がある。これらの言語要素が本研究の分析結果に影響を与えている可能性は十分に考えられるが、その検証については今後の課題としたい。

注

*本稿は、日本語用論学会第6回大会(2003年12月6日、於神奈川大学)において口頭発表した原稿に

加筆・修正を加えたものである。発表に至るまでご指導下さいました井出祥子先生、藤井洋子先生（日本女子大学）をはじめとする先生方、また、投稿論文査読時に貴重なコメントを下さった諸先生方に心より御礼申し上げます。

- 1) 森山（1989）による用語。森山は驚き表示を「当該情報が応答者の情報の中に所有されていなかったということの表示」であるとしている（ibid.: 80）。森山が例として挙げている「へええ」、「ふーん」、「本当」、「あっ」、などの表現に加え、本研究では「（あっ） そうなんだ」、「そうなんですか」も驚き表示であるものとして分析している。
- 2) Heritage（2002: 200）からの引用に表記上の修正を加えたものを記載した。
- 3) 本稿で用いた文字化表記法は以下の通りである。
 - [] 重複
 - 切断された単語
 - 切断されたイントネーション単位
 - ! 高ピッチの単語
 - = 延び
 - ... ミディアムポーズ
 - .. ショートポーズ
 - @ 笑い
- 4) ここでカヨが「-ね」形から「-よ」形にスイッチしていなかったとしたら、カヨがサキに対して認知的権威を委譲し、アシメトリックな関係性に帰着したような印象を与える（以下の例参照）。
 - 例) サキ：姉、カヨ：妹 ドライブ中の会話
（高スピードで抜かして行った車に対して）
 - 1 カヨ：→ すごいね
 - 2 サキ：→ すごいよ
 - 3 やっぱああの馬力にはいくらなんでも勝てない。
- 5) 「-よね」形の後に続く発話の形は多様であり、そこに制限は観察されない。このことから、評価的発話／情報提供発話につく「よね」は、相手がどのようなスタンスを取るのか予測がつかない場合に、とりあえず自分のスタンスを中立的に取るのに使われる形であるという仮説を立てることが可能だと考えるが、その検証は今後の課題とする。
- 6) Morita（2003）でも同様の立場が取られている。

参考文献

- Cook, H.M. 1990. "The Sentence-Final Particle Ne as a Tool for Cooperation in Japanese Conversation." *Japanese/Korean Linguistics*, 29-44. Stanford: CSLI.
- Cook, H.M. 1992. "Meanings of Non-Referential Indexes: A Case Study of the Japanese Sentence-Final Particle Ne." *Text* 12 (4), 507-539.
- Eda, S. 2000. "A New Approach to the Analysis of the Sentence Final Particles Ne and Yo: An Interface between Prosody and Pragmatics." In M. Nakayama and C. J. Quinn Jr. eds. *Japanese/Korean Linguistics vol. 9*, 167-180. Stanford: CSLI.
- Heritage, J. 2002. "Oh-Prefaced Responses to Assessments: A Method of Modifying Agreement/Disagreement." In C. E. Ford, B. A. Fox, and S. A. Thompson eds. *The Language of*

- Turn and Sequence*, 196-224. Oxford: Oxford University Press.
- 井上優. 1993. 「発話における『タイミング考慮』と『矛盾考慮』—命令文・依頼文を例に—」『国立国語研究所報告105 研究報告集14』, 333-360.
- . 1999. 「状況認知と終助詞—『ね』の機能—」『日本語学』18巻9号, 79-86.
- 神尾昭雄. 1990. 『情報のなわ張り理論—言語の機能的分析』東京: 大修館
- 片桐恭弘. 1995. 「終助詞による対話調整」『言語』24号, 38-45.
- 金水敏. 1991. 「伝達の発話行為と日本語の文末形式」『神戸大学文学部紀要』18号, 23-41.
- 金水敏・田窪行則. 1998. 「談話管理理論に基づく『よ』『ね』『よね』の研究」『音声による人間と機械の対話』257-271. 東京: オーム社
- 小山哲春. 1997. 「文末詞と文末イントネーション」音声文法研究会(編), 『文法と音声』, 97-119. 東京: くろしお出版
- Morita, E. 2002. "Stance Marking in the Collaborative Completion of Sentences: Final Particles as Epistemic Markers in Japanese." In N. M. Akatsuka and S. Strauss eds. *Japanese/Korean Linguistics* vol. 10, 220-223. Stanford: CSLI.
- Morita, E. 2003. *The Japanese Interactional Particles Ne and Sa: An Analysis of their Conditional Relevance for Conversation*. Unpublished doctoral dissertation, University of California Los Angeles.
- 森山卓郎. 1989. 「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1号, 63-88. 大阪大学文学部日本学科.
- Schegloff, E.A. 1982. "Discourse as an Interactional Achievement: Some Uses of 'Uh-Huh' and Other Things That Come Between Sentences." In D. Tannen ed. *Georgetown University Round Table on Languages and Linguistics*, 71-93. Washington D.C.: Georgetown University Press.
- Tanaka, H. 1999. *Turn-taking in Japanese Conversation: A Study in Grammar and Interaction*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- . 2000. "The Particle Ne as a Turn-Management Device in Japanese Conversation." *Journal of Pragmatics*. 32: 8, 1135-1176.